

佳^よき目のお皿

「おめでとう」や「ありがとう」を

折形で包み、おもてなしを彩ります。



和紙で物をつつむ作法「折形（おりがた）」。

武家社会の礼法の一つで、六百年以上前から伝承されてきた日本の文化です。

進物を包むことや、儀礼・儀式に使う飾りに用いられてきました。

水引を結った本来の姿も美しいですが、ひらいた時に現れる折り目も美しく、慶びを象徴する文様といえます。

その姿を、伝統工芸高岡銅器の鑄造技術により、お皿として表現しました。

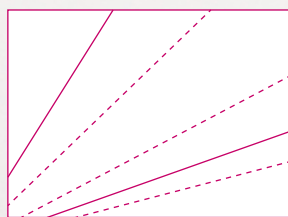
折形は、包む贈り物ごとに形が決められていて、何種類もの包み方があり、其々に名称があります。

「木の花包み」は、その中の最も代表的な形で、天に向かって伸びる樹木を包む折形です。

「佳き目のお皿」は、「木の花包み」を含む四種類の折形をモチーフに選びました。



木の花包み



株式会社竹中銅器
since 1927

折形の歴史

折形は将軍家中心に秘伝として門外不出で伝承されてきました。古文書によれば、原型は鎌倉時代に誕生し京都室町時代の三代将軍足利義満が高家に命じて武家独自の礼法を制定し、大名・旗本などに限って指導しました。外の礼法（弓馬礼法）は小笠原家が、中（うち）の礼法（殿中の礼法）は伊勢家が任され、礼法を指南しました。それらの礼法の中に和紙で贈り物を包む「折形」がありました。社会の頂点にあった天皇家中心の公家社会でも和紙を使った折形がありました。公家は主に絹の布（布帛）で包み、絹の紐で結ぶやり方が中心でしたが、それに対して武力を誇った武家は主に強靱で白い和紙を使って包み、和紙を縫った紙縫り（または水引）で結ぶ独自の文化を考案しました。多彩な自然界の色を使った絹の文化が公家、それに対して自然界の生なりの分厚い楮の繊維で作られた和紙を使ったのが武家の和紙文化です。



時代が平和になり江戸や大阪中心に商人文化が栄えると、武家は仕事を失い同時に門外不出であった折形礼法も寺子屋などで教えられて一般に普及して行きました。多くの礼法の流派も派生していきました。全国の農家が副業で和紙を漉くようになると和紙も一般に普及し、特に折形の粉包みなどの造形のおもしろさから、単に形を折って楽しむ「遊戯折形＝おりがみ遊び」が急速に普及しました。物を包む礼法から形を作って楽しむ「工芸、遊び」として発展します。器用な日本人ならではの応用発展です。明治以降、義務教育では作法の一環として必ず折形を学びました。大正生まれの世代の方が最後の習得者です。

——— 山根折形礼法教室ホームページより抜粋

折形の名称と意味



木の花（きのはな）

天に向かって伸びる梅や桜、松といった樹木の包み方で、代表的な折形です。受け取った側は贈り主のことを想いながらその木花を活けます。



水引（みずひき）

人と人との結びつきや、魔除けの意味を持つ「水引」の包み方。



末広（すえひろ）

末広がりの形から縁起が良いといわれる「扇子」を贈る際の包み方。



弓弦（ゆづる）

弓に張る弦の包み方。弓は邪気払いの縁起物とされています。

佳き日のお皿

材質：アルミ

木の花

サイズ：W160 D120 H13
重さ：160g／枚
¥7,700（税込）

水引

サイズ：W160 D120 H13
重さ：160g／枚
¥7,700（税込）

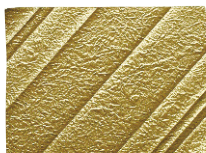
末広

サイズ：W130 D130 H13
重さ：140g／枚
¥7,700（税込）

弓弦

サイズ：W130 D130 H13
重さ：140g／枚
¥7,700（税込）

こがね色



しろがね色



しろたえ色

